

高・大・一般 漢字(楷書B)

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

平形 精逸

牛概造像記 ②



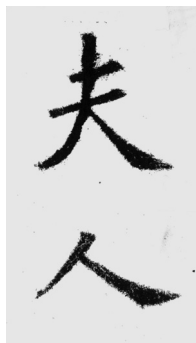
夫人(集字)



参考「九成宮醴泉銘」(集字)



重心高く右はらい長い

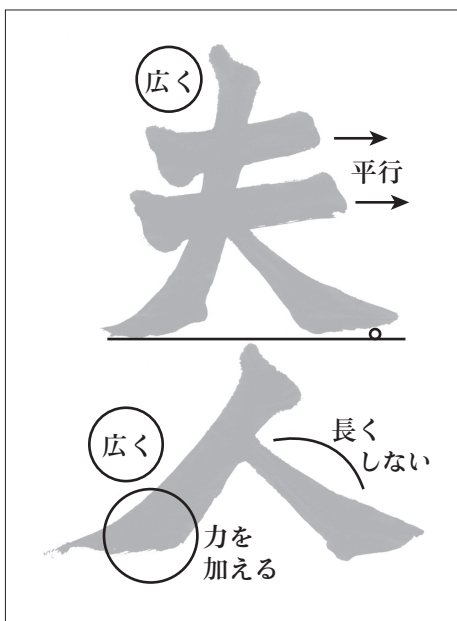


〈解説〉

先月号で解説したように、楷書を人間の成長過程に例えれば「造像記」は〈青年期〉、「初唐楷書」は〈成人期〉にあたるため、「造像記」はやがて重心の高いスマートな形になる発展途上の作品ということになります。ただし、「書写から書道へ」、すなわち「基本から応用へ」と展開する楷書の学習過程を考えると、どうしても先に学んできた整った書写の形が目や手にしみついて、なかなか「北魏楷書」の特徴に迫れない学習者も多いのが実情です。慣れ親しんだ楷書の書き方を一度すべて忘れ、先入観にとらわれず写実的に臨書するよう心掛けないと、この古典の特徴を把めません。

〈学習上の留意点〉

横画の起筆を垂直に打ち込み、終筆も同様に鋭く、穂先を生かしながら下に抜きます。左右払いの終筆も三角形をつくるようにします。「夫」：一画目の左上を広くとり、右払いが左払いより下からないように書きます。「人」：「夫」と同じように左上部を広くとり重心を下げましょう。



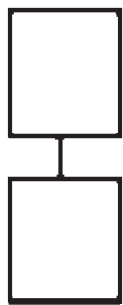
高・大・一般 仮名入門

熊坂 尚史



〈釈文〉うち・やと

一字目が中央で終わり、二字目が中央から始まる連綿のパターン②



※図は高野切第三種より

「入門」のため、仮名を書き慣れていない読者を想定しています。課題は『高野切第三種』から抜粋していますが、必ずしも単語にならないこと、また初心者向けに解説するための便宜上、字形や用筆を一部調整していることを予めおことわりします。

今月も中央から中央への連綿※です。仮名の連綿は、よく川の流れに例えられますが、このパターンは「激みがなく勢いのある流れ」のような印象を受けます。

※連綿：二字以上を続けて書く技法のこと。

うち：「ち」の一画目を短くしています。これにより中央から始まる形がさらに強調されます。

やと：「や」から「と」の連綿は切れ目なく一氣に書かれています。「線の共用」ともいえます。

どちらも途中で力を緩めず、「しっかりとつながる」ことが重要です。また、それぞれ中心が移動していることにも注目してください。

今回も筆をいったん止めて、弾力を確かめて書くところを少し強調しています。ぜひ参考にしてください。

〈用具用材について〉

筆：直径10mm程度の兼毫筆がおすすめです。

墨：油煙墨を磨って清書しましょう。

紙：提出用紙は半紙（およそ縦33cm×横24cm）

滲みの少ないものを推奨します。

落款は「〇〇（下の名前）臨」とします。